

＜書 評＞

三沢義一（筑波大学教授）著

障害と心理

本田哲三（国立塩原温泉病院理学診療科）

リハビリテーション医学において心理的アプローチの必要性が叫ばれはじめて幾ひさしい。しかし、一方では「心理＝心理検査」といった短絡的発想や治療者の主観的な「おもいやり」をもって十分とする態度もあいかわらず散見され、以上の理念は日々のリハビリ臨床の土壌には十分根づいていないと言いがたいのが実情であろう。

このような背景にあって本書はまさに時代のニーズに適した企画といえる。

著者は昭和28年より国立リハビリセンターにて身体障害者の心理にかかわっている臨床心理の第一人者であり、内容もリハビリテーションの心理学的意義から障害別の特徴にいたるまで要領よくまとめられ、知識

を整理するには格好の書となっている。

すなわち、第1、2章ではリハビリテーションおよび障害と心理の関係について理論的に考察が加えられ、第3、4章ではリハビリ心理にとって、もっとも重要な問題である「障害の受容および適応」について事例を呈示しながら平易に説明してある。さらに第5章以下は具体的な評価方法や各カウンセリング理論が紹介され、そのうえ視聴覚障害、小児喘息など多くの障害の心理と留意点について適切なコメントが添えられており興味ぶかい。

しかしながら、読者が本書に即明日の治療に役だつ技法をもとめるとき必ずしも十分ではない点もあるものと考えられる。たとえば、ダイナ

ミックなチーム医療のなかで具体的には各スタッフがどのように役割を分担しつつ患者にアプローチしていくのか、また実際には心理的対応と併用されることのおおい向精神薬の適応なども臨床では常に頭を悩まされるものである。

本書の大きさからして、これらの点をすべて網羅するのはもちろん困難であり、本来「初心者にとって良いマニュアル」を目指す本シリーズの主旨にも反するものであろう。したがって著者にはさらに掘り下げたリハビリ心理の書を世に出されることを切に希望する。

ともかく本書の内容を一つの基礎としつつ、読者自身が臨床経験の積み重ねを通じてさらに各々の立場でのリハビリ心理学を発展させることを期待したい。その意味で医師のみならずPT、ST、ナース、MSWなど各リハビリチームメンバーにぜひ御一読をお勧めする。

（A5、頁128、1985年、¥ 2,000、医歯薬出版 刊）